

「ぼすとまん」一九五九年七月
全日本郵便切手普及協会

私の切手趣味

矢口 新

教育者は古来かたぶつで物わかりがわるいことになっている。切手趣味などという高尚な趣味は持ち合わせていないのが普通だろうというのが通り相場であるらしい。尤もこの頃は時勢の進歩と共にそんな物分りの悪い教育者ばかりではなくなったから、こんなことを言うと、どこからか抗議が出るかも知れない。反対に切手趣味などというような高尚な趣味は教育者に最もふさわしいものなどというように言う人もいる。教育者が切手趣味にふさわしい程、高尚かどうかは私にはわからないが、私とは確かである。上の論説から言うと、つまり物わかりがわるいか高尚でないかどちらかであるというは私は自分は教育者だろうかどうかと反省してみると、教育

者たるにふさわしい活動はあまりやっていない。私の仕事は教育のことをいろいろ調べたり、研究したりするのが中心で、自ら教育することは余りない。教育者の仲間から言わせると、もぐりだということになるのかも知れない。そういう人間の言うことだから、これから書くことも余り教育者の意見としてはふさわしくないとと言われるかも知れないし、切手趣味のない奴の言うことだから、ピントはずれであるかも知れない。

*

実は私の娘は私よりは切手趣味をもっている。今中学一年生だが、もう二、三年切手をあつめていて、面白いかと私が間の抜けたような質問をすると、たのしいわ、と如何にもたのしそうに答える。それ以来、私は、自分の所に来た、外国からの手紙にはられた珍しい切手などは気をつけて娘に渡すことにしている。娘の切手趣味に協力しているつもりなのである。切手をあつめている人は大勢いるかと聞くと、随分いるということであるから、中学生の間に切手趣味も相当普及しているらしい。

「そういう人は、新しい切手が

出るたびに買いに行くのかね」などと、また間の抜けた間を発すると、そうだと答える。

「それがどうして面白いのかね」

また私の質問はピントが外れる。

「買うばかりじゃないのよ、交換したり分類したり、いろいろ調べたり」

「ふむ」

私は、結局要領を得ないで終わってしまう。つまり私には切手趣味がないのだということになるのだろう。

「あんまり、その新しいのを買うばかりでなく、自然にたまるのがいいと思うがね、自然にたまるだけでは、面白くないかな」

私はこんなことを言ってみる。

「そりゃ、自然にたまるのが本当よ」

娘は簡単に賛成してくれるので、あつけない。

*

私も時折は、外国の人と文通することがある。そういう時これまでは、あまり気にもしなかったが、切手普及協会の理事という役目をいただいたから、一寸考えるようになった。何かめずらしい気になった切手でも使って、手紙の内容

ばかりでなく、封筒にも心持ちを表現したらいいのではないかとしようなことである。そういう手紙をもらったら、もらった人は、やはり、よい思い出になるのではないか。

私も外国の人からもらった手紙は大事にしている。国境をこえて、人々がざつくばらんに話が出るものがどんなにうれしいことは、私も国際会議に出たり、外国旅行をしたりして痛感した。だから手紙などでも、そういう気持ちのあらわれたものなどは私は大切にすることにしている。だから、こちらから出す手紙にも、中味だけでなく、切手などにも細かい心づかい出して出すのがよいのではないだろうか。

こんなふうに切手のことについて、考えるようになったのは、これは全く切手普及協会に関係するようになってからのことであつて私は、私なりに、切手趣味の普及の仕事が、こんな形で私にあらわれたのであると思つている。しかし、私自身、切手を収集してどうのこうのというだけのひまもないし、とても出来そうにないことだと思つている。だから、やつぱり、

切手趣味などということとはわからない奴なのである。

*

アサヒグラフィが一昨年秋頃からだったか、切手の分類したものをキレイなオフセット印刷で毎号はさみこんでくれている。確か百号になったと思うが、これは、見えてなかなか面白く、私などには手軽にたのしめるものである。

いつか大分前にうちの娘に、こんなのは集めておいたらいいだろうにといったことがあったが、その時は本当の「切手じゃないから」とか何とかいって、歯牙にかけられなかった。その時切手趣味というのは、そういうものかと思っただのであるが、しかし私は、こういう印刷されたものはそれなりに役立つし、面白い。見ていてなかなかたのしいものだと思えるようになる。つい最近、私がためておいたのを、子供にやったら、何しろ百枚ものポリウムになると、また価値が出来るらしく、今度は、大変珍重がってスクラップして、おこうなどと言っていた。そういうものを二年の間こつこつためておくという点は、私にも立派に収集本能があることを証明してい

ると思う。

私は娘に、「どうだお父さんにだつてこうして、気長にこつこつためておく心掛けはあるのだよ」といったものである。収集のよさは、一つは、そういう時間をかけるということにあるのではないだろうか。長い間、志をまもって、同じ心でいられるということは、人間にとつて大切なことであろう。何事によらず、時間をかけたものの尊さといったことは、もつと人々に認識されてよいことであろう。

とくにこの頃は、時間をかけないで、その日ぐらしのもの、思いつきのものが多く、人々も次々へと流行するものに追われている。変化も立派なことであるが、不変のものもまた尊い。本質的なものは案外不変のものではないだろうか。そういう意味では、切手を集めることを、或はそれを愛好することとを、二十年三十年と続けて居る人々は、やはり落ちついた人生をおくって居られるのではないだろうか。私は子供たちが、そういう世界におかれてみるのは大変いいことと思う。

ただこの頃のように、新しい切手が次々へと発行されて、子供は

その新しさに目がくらんで、次々へと買いあさつていたり、ただ種類を多く持つていることだけを目あてにしたりしているのを見ると、一寸首をかしげたくなる。それは趣味ではなく、単なる流行ではないか。趣味とは、もつとしつとりと、落ち着いたものでなくてはならないのではないかと思う。

*

私は今の所、あまり収集癖はないようだと思っているが、それでも、教育研究の仕事二十五年もやっていると、随分いろいろな書物が集まる。時に応じて様々な問題に興味をもつたから、書物の種類も必ずしも一様ではない。大部分はガラクタ本であるが、中にはあの時、買って置いてよかったと思うものもある。

それは、何も自分が持っていることがよいということではなく、人々がそれを利用し、よい資料だと喜んでくれるのである。当時は、よくわからなかったが、これはなかなか面白いと漠然と感じて買っておいたものが、今になって貴重なものになるなどということは嬉しいことである。何となく、自尊心も満足させてくれる。またそう

いうものを見てみると、自分の歴史を振りかえることが出来て、なかなかいいものである。

切手の趣味にもそういうことがやはりあるであろう。その内容のことになると、私にはよくわからないが、切手週間の展覧物などをみると、子供たちが様々に切手を分類しているのを見て、驚かされる。これは子供たちの発見だと思ふ。同じ切手でも、こう様々なものが発見されるのかということは今更考えさせられる。その点では、私などは、全く下賤のものでも言つてよく、全然、そういうものを発見する目をもっていない。しかし発見するということは、やはり目を養うことを前提とするので、それはまた時間をかけるということにつながるのではないか。単なる流行でない、時間をかけた趣味として切手趣味が普及することとは人生教育として意味があるように思う。

と、ここまで書いて、やつぱりおちが教育の問題になつてしまつた。どうも仕方のないことである。

—全日本切手普及協会理事—